



完全燃焼へ発破かける

歌手から転身、会社経営層に Naokiさんに聞く

Naokiさん

高知市出身。8人兄弟の4男として育った。大学卒業後、シンガーソングライターに。現在はアウトドア用品メーカーで海外営業を率いる。週末はサーフィンを楽しむ。

-Naokiさんのビジョンは「会社や社員、個人がポテンシャルを最大限に発揮できるよう、ビジョンを描き、導くこと」です。どういう意味を込めていますか

「私はもっている可能性を全部使い切りたいと思っている。自分だけでなく、人にもそうになってほしい。自分の会話はよく『そういうことできるんじゃない』とか『そういうの向いているよ』といった話になる。ポテンシャルにフタがされていると思えば『ここを改善されたらすごくなるのでは』と自然に思える」

「中小企業で働いているのもそれが理由だ。中小はいろんな問題を抱えているが、何かブレーキがかかっているところを変えると、ガラッと大きく変わる。その変化が面白い。昔ミュージシャンをやっていた時、誰かの曲を聴くたびに『こういう歌い方や曲にしたらもっと伸びるかも』と思っていた。それに近いものがある」

迷う人の背中を押したい

—他者に届けたい価値を、「今をどう捉え、これからどこに進むべきか、整理がついた」としています。どういうメッセージなのでしょう。

「何か迷っている人に、もともとやりたかったことなどを整理して伝えることで、あるべき姿を明確にしてほしいと思っている。自分が客観的に伝えることで、本来の強さを思い出してほしい。何かを決めるとき、最後に背中を押してあげるようなことをしたい」

「私自身、これまで受験勉強や部活、そのあとは音楽とそれぞれですごく頑張ってきた。ただ、毎回頑張ってきたけれど、それぞれやっていることがバラバラで何が自分の中心になのだろうと感じた。そこで『自己理解プログラム』を受けることにした。プログラムを進めるうちに、過去の自分に共通点があることがわかった。自分は何かやろうと思ったとき、まず痛快な出来事を達成するイメージをもつ。そして『だからやらなきゃいけないんだよ』と自分にも他の人にも発破をかけてきた。それにやりがいがあることに気づいた」

—「完全燃焼」という価値観を大事にしています。どうしてなのでしょう。

「音楽を大学卒業してから本気でやり始めた。周りからは『20過ぎて曲作って音楽でやっていくなんでどうなのと』言われた。親も心配してくれた。ただその時に思ったのは『死ぬときにやるだけやったと思えなかったらダメだな』と。完全燃焼しないといけないんだと自分を追い込むことに決めた」

「シンガーソングライターとして32歳まで活動した。曲を書いて歌い、ライブの時はバンドを組んだ。自分は完全燃焼を自らしかけていく。最後は1000人入るライブハウスを1年先に予約。普段のライブでは50人

くらい集めるのにも必死だったが、とにかく思いつく限りのことをやってお客を集めた。1年がかりでやって、結果うまくいった。これ以上の伸びしろを感じず、最大限やりきったと思えた」

一 逆に完全燃焼できなかった経験はありますか



歌手として本気で活動していた経験がいま生きていると語る

「就職して仕事を始めてからは、まだ完全燃焼したという感じは得られていない。部活のキャプテンなら自分で決められるし、音楽も自分で曲を書き歌も自分で決められるが、会社はほかの誰かが作ったもの。目に見えないルールもある。逆に完全燃焼してはいけないのかな、と思う時もある。個人としてはそのあんばいを難しく感じている」

「自治」あつての完全燃焼

一 「自治」という価値観もお持ちです。どういう意味を込めていますか。

「私は自分で決められる環境の中で、すごくやりがいを感じる。自治がないと完全燃焼もできない。会社でも自分が決めて、その結果も自分が背負えるということになれば続けられるが、細かく指示されると気持ちが消える。『やるべきことが決まっているなら、ここに私いる必要ないですよ』とってしまう。自分は自分自身で考えるタイプだから、ここは自分がいる場所じゃないんだろうなと感じる」

一 会社員は縛りが多く「自治」が難しそうです。ミュージシャンから転身したのはどうしてですか。

「ミュージシャンになろうと思ったのは、活動するほど自由になれると思ったからだ。好きなことをやってお金も入れば、次はこんなライブをしてみようと思つて選肢を広げていける。ただ8年ほどやっていてなかなか売れずにいると、じゃあ売れるために何をすればいい

と考えるようになった。そうすると、どんどん自由じゃなくなり、これは楽しくないぞと思うようになった。貧しくても音楽を死ぬまでやろうとまでは思わなかった」

「32歳がギリギリのタイミングだと感じていた。大学卒業後に就職すれば32歳は会社員10年となる。その差ならば埋められるのではないかと感じた。例えば37歳まで音楽やって、そこから15年会社員やった人の中に組み込まれると絶対にうまくいかないと思った。その時点ならまだいけると思い、就職しようと思った」

—会社はどう選んだのですか

「1社目は入れるところに入った。2社目以降は中小企業で、変化が起きそうなところを選んでる。先がどうかかわからない場所の方が面白いと感じるからだ。自分が歩んできたちょっとアウトロー的なものが、うまく変化をもたらせられれば最高だと思う。先月からは3社目の釣具メーカーで働いている」

「リーダーシップ」に違和感

—スキルを「リーダーシップ」としています。

「これは自己理解を通じて初めて自覚した。正直言うと、『リーダーシップがスキル』と書くことに、違和感がある。自分自身、そういうキャラが好きじゃなかったからだ。リーダーになりたいという人を『お前は権力欲しいだけだろ』と斜めに見ている気持ちはずっとあった」

「ただ、社会人になってこれまでリーダー的な役割でうまくやってこれたり、部下がなついてくれたりしてきたことに気づいた。それは、音楽をやっていた時に

『いいから俺についてこい』となんとか人を引き付けないといけないという努力をしてきたからなのかもしれない。このリーダーシップが、実は気づけていなかった長所なのだろうと思った。ただ、リーダーとして生きていきたいということは全然思っていない。静かに生きていけるならそうしたい。リーダーシップという言葉がまだあまりしっくりきていない」

—以前は独立して働く考えを持っていたとお聞きしました。いまはどうなのでしょう

「『自治』の価値観があるから以前は、仕事も自分でやらないとこれ以上満足感が高まらないと考えていた。実は、自己理解を始める前は3か月間プログラミングの特訓をやっていた。1人でやってたらストレスもないだろうと思ったからだ。だけれど、やってみるとこんな一人でパチパチするのは無理だなと思ってきた。プログラミングといったスキルの前に、もう一回自分のことを考えないといけないと思った」

「自己理解を通じて、わかってきた特質を見てみると、社会人になってこれまでうまくやってこれたのは自分の強みを発揮してこれたからなのではと思った。まだ独立した方がいいかどうかははっきりしていない。独立するというイメージが湧いていない。いまは部下が何人かいて、他の部署の人もいる環境の中で活躍できるような気もしている」

—読書に力を入れているのはどうしてですか

「自己理解を通じて、自分ができることは人の中にあるビジョンを取り出したり、人を導くようにリーダーシップをとったりすることだと気づいた。会社はアウトプットの間となっているので、家では読書などで日々インプットに取り組むことが今の自分にあっていると思っている。会社でより上の立場になってもアウトプットしていけるようにビジネス戦略や経営変革、MBAといったものを読んでいる」

ーサーフィンがお好きなのですね

「ストレングスファインダーでは戦略、内省、着想が上位。よく頭の中で考え事をする。だからいったんリセットする時間も大切だ。サーフィンは傍目で見るとよりも結構ハードで、やっている間に頭が真っ白になる瞬間がある。頭の中でワチャワチャ考えているのがリセットでき、クリアになる。いまは静岡の焼津に住んでいて海が近い。天気の良い週末はだいたい行っている」

「あと最近気づいた好きなことは、感情を言語化すること。人の感情やもやもやした抽象的な状況について言葉でずっと考えている。歌詞を書いていた時もそうだけど、感じたことを言葉にするのが好きなのだと思う」



新会社では入社後すぐに会社の5年計画の策定を任されている

困難に問われる人間力

ー今の仕事の課題についても教えてください

「今の会社は入ってまだ1か月くらいだが、会社の5年計画を作る仕事を任されている。いまは1年の計画ですらふわっとしていて、年の最後になってあれ赤字だ、どうしてだろうというようなのが実態だ。今年中に計画を提示するところまで持っていきたい」

「今はまだ計画を立てる前の段階。そもそも原価もわからず、一個売ってどれだけの儲けが出るかもわからない。いま2、3人のチームで、全部の商品を整理しようとしている。去年の実績がこうだから、5年でこうしようということが初めてわかる。一個一個の原価や利益を把握するためにこの1か月くらいやらないといけない。なかなか大変だ」

ーいま懸念していることは何ですか

「昔からこの会社にいる人はプライドもある。入ったばかりの自分が5年計画について話しても、あまり響かないかもしれない。理解はしてくれるだろうけど、本気になってくれるかわからない。『同業他社で実績を上げてきた噂のやつがきた』という警戒心もあるだろう。だから結構きつい状態であると思う。面と向かって喧嘩はないが、心理的にはぶつかり合いが起きているなと思っている」

ーどうすれば打開していけるでしょうか

「大事なことは、彼らが本来会社で『こういうことができたらいいな』という思いと、自分がやろうとしていることが同じだということを、いかに理解してもらえるか。本当にやりたいことをやろうとすると『こんな課題が出てくる。だけどこれは乗り越えないといけない』といったことになる。彼らにとっては自分は一時期敵に見えるかもしれないが、そうではなくて味方だと気づいてもらわないといけない。人間力が問われると思っている」

「これまで1年分の計画すらないのに、5年分の計画ができるのは初めての経験だと思う。それぞれの人が納得できる計画にできれば、楽しく嬉しい気持ちになり、生き生き働けると思う」

ーまずできることは何ですか

「上機嫌でいることだ。上司が不機嫌で、むすっとしていたりイライラしていると、やりたいこともできなくなる。会社にいる人から見ると自分は新参者。やはり上機嫌でないと情報も入ってこないし、相談もされない。上機嫌が大事」

「上機嫌でいるためには体力が必要。疲れると機嫌悪くなるし、テンションも落ちる。上機嫌を保つために

は腕立てや腹筋など、日々の筋トレが大事。ユーチューブで2、3分これだけやればいいというものをしている。毎日夜に1回やるだけでも、全然変わってくる」

コーチの目

人の思い尊重する導き

取材前はリーダーシップがスキルということから、剛腕ビジネスマンの方を思い浮かべていましたが、元シンガーソングライターだったという異色の経歴に驚きました。1時間のインタビューで、どの質問に対しても具体的なエピソードを交えて明確に語ってくれた姿に「完全燃焼」を大切にする一端が見えたように思いました。

Naokiさんは最近印象深かった本として「1兆ドルコーチ」を紹介してくれました。私も読んでみますと、この本の主人公のビル・キャンベル氏は、元アメフト選手でその後ビジネス界に入り数々の経営者を率いたコーチだと知りました。人を深く信頼し、より勇敢になるように発破をかけて人の可能性を引き出すコーチングスタイルだったそうです。

Naokiさんの思い描く「リーダーシップ」はまさにこのスタイルなのではと思いました。リーダーシップという言葉の響きには「独善的」といったニュアンスもありますが、Naokiさんの場合は「人の思いを尊重する導き」が中心にあるのだと思います。Naokiさんの力強い眼差しと、野心を秘めた落ち着きは、これからもきっと一歩前に踏み出したい人の背中を押し続けることでしょう。

(聞き手は取材コーチ すけさん)